
Universe operator

ライデン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Universe operator

【ΖΖード】

N1328E

【作者名】

ライデン

【あらすじ】

10年前に起きた大規模な戦争「機械戦争」。宇宙からの侵略者と地球の兵士との戦いは、多くの悲劇を生んだ。それを機に開設された宇宙機械戦争特捜部隊「VIRTUAL」に、今、新たな歴史が生まれようとしている・・・。

プロローグ

21XX年のこと

地球のとある一点で超大規模な戦争が起こった。

バーチャルな武器をもつた地球の兵士と

強大な魔力を持つ宇宙からの侵略者たち。

人々はこれを 機械戦争 と呼んだ。

多数の死者と、悲しい残留を生んだこの戦争・・・

ギリギリの状態で勝つた地球の兵士たちは、この戦争を機に
宇宙機械戦争特捜部隊 “バーチャル VIRTUAL” を開設した。

もちろん、死を恐れた普通の人は入隊を拒んだ。

だがしかし、世の中には真の勇者と呼ぶべき人がいるものだ。

機械戦争から10年の月日が経った今、VIRTUALに新たな歴史が生まれようとしている

プロローグ（後書き）

ファイター5は途中で連載打ち切り、強制終了をせてしまいましたが、今回は頑張るので応援よろしくお願いします。

Ep・1 マイザー・デルタ

「J」はVIRTUALの基地。

基地と言つても、ホテルみたいな建物なので緊張感は要らない。だが、なにぶん、隊員が全ての格を合わせても8人なので、静けさが緊張感を誘うことはある。

その基地の明るい食堂に、赤い長髪の青年が座っていた。

マイザー・デルタ、17歳。たつた今日、正査から上級正査に昇格した所だ。

この基地の格は、正査・上級正査・特査・上級特査の4段階で、各格に2人ずつ隊員が配置されていた。

だから、昇格したと言つてもまだ下の方、あまり喜ばしいことではない。

マイザーはいつもは内向的で、しかし情に熱い性格なのだが、今日はずつとずつと硬い表情をしていく。

「マイザー、どうした。顔が暗いぞ。」

声をかけたのはライデン・ギル。上級特査で、ただいまVIRTUALの実力を持つ男。

「い・・・いえ、なんでもないです、はい」

マイザーの表情が硬いのには訳がある。なにせ、緊張しているのだ。ずっとずっと憧れ続けたライデンさんと・・・10年前には14才という若さで機械戦争に参加し、敵の心臓部までたどり着いて勝利へのきっかけをもたらしたライデンさんと・・・

こつして向かい合つて食事をするのは初めてなのだから。

声をかけるチャンスではいくらでもあった。

でも、ライデンには世界の何よりも溺愛する部下がいるのだ。

つい最近まで、マイザーと一緒に正査の少年なのだが……。あまりにライデンが彼を愛するため、声をかける余地がないのは仕方のない事だった。

「どうだ？ 今回の昇格の感想は。」

ライデンも硬い表情で聞いてくる。と言つよりも、彼はもともと無表情なのだ。

「嬉しいですけど……上級正査の上官、顔も名前も知らないくて……心配です」

マイザーが紅茶をすすりながら答えた。

「そうか。まあ、アイツは口で説明できる奴じやないな。寮に戻つて見て来いよ。」

ライデンはそう言つと席を立つた。マイザーはこの一時が終わるのが惜しかつたが、もうだいぶ長い時間食事をしていたので、寮に戻ることにした。

“上級正査”

そう書かれたドアは、マイザーにとって見たことのない未知の領域だった。

ドアを開こうとするが、思ひどどまり、ノックをした。

トントンと、無機質な木の音がマイザーの緊張感を煽る。

「入れよ~」

やつと声がした。びつやら男のようだ。

「入ります。」

マイザーがドアをあけると、そこには驚愕と喜びべき男が立っていた。

黒いマント、黒く長い爪、銀の髪、赤い瞳、チラリとのぞく牙……。

漫画に出てくる死神のようだった。

こんな上官（今となつては同僚）、見たことはない。

「マイザー・デルタ、17歳です。よろしくお願ひします。」

少し緊張しながら自己紹介をした。すると死神男はフウとため息をつき、

「・・・ガキだな。そんな所で立つてないで、そこにでも座れ。それから自己紹介をしろ。」

微妙に睨むような目で言った。

マイザーはささつと座り、もう一度同じセリフを繰り返そうとした。

「やめる。同じ事を2度も聞くのは趣味じゃない。考え方までガキか、貴様は。」

死神男はマイザーの前に手のひらを突き出し、ストップサインを作った。

「自分の事を語るのは好きじゃない。だが、久方ぶりの同僚だ・・・。少しは顔に出ている要望にこたえてやってもいいぜ。」

マイザーは心を見透かされ、焦りの表情を見せた。

「オレはスペシネフ・ザイ。年は18歳だ。あとは、半神半人という事を知つていてもらいたい。」

マイザーはきょとんとした。半神半人とはいつたい・・・。

「ああ。また顔に出てるぜ、半神半人ってのはよ・・・。

力を得るために魂を半分神様の魂にすることだ・・・。」

「もしかして・・・死神の魂と混じってるのか？」

「意外と察しがいいな、貴様。死神の力はもつとも強大だからな。まあ、その代償も大きいのは間違いないが。」

クールに話すが、背負う運命は大きそだと感じた一瞬だった。

「とりあえず、よろしく頼むぜ」

スペシネフの方から差し出された手に、少々驚いたが、その手を軽く握った。

マイザーとスペシネフ・・・

上級正査の新たな歴史が幕を開ける

朝

マイザーは朝から慌しかった。ゴソゴソと着替えたりしている。

「うるせーな。こんな早くからMISSION（任務）か？」「スペシネフは起こされて機嫌が悪いようだつた。

「違う違う、正査の部屋へ行くんだよ。」

「なんだ。オレが嫌で逃げたくなつたのか。」

スペシネフは不機嫌そうな声でそう言い、またベッドに潜り込んだ。

「フン。お別れのあ・い・わ・つだよ。」

マイザーも負けずに言い返し、部屋を飛び出した。
正査の部屋は階段を下りてすぐだ。

“正査”

こう書かれたドアは、入っても違和感のない慣れきつた部屋だ。進級した一日目に、以前のクラスの前に立つとの同じような感覚だ。

ノックもせずにドアを開くと、真っ先にライデンの顔が見えた。

「ライデンさん！？」

マイザーが固まつたような声を出した。

「どうした。別に驚くことは無いじゃないか。テムジンに会いに来たんだよ。」

大柄なライデンの大きな膝に、ちょこんと乗つかる小さな少年。ライデンが溺愛している部下、テムジン・エイティである。

テムジンは15歳だが、体格、顔、性格共にもつと幼く見える。

「テムジンもライデンのことを何よりも慕っていた。

理由と言つのか、テムジンは孤児で、同じ境遇を持つライデンと人暮らしだったとかどうとか・・・という噂がある。

「マイザーくん…どうしたの？」

テムジンがライデンの膝から飛び降りて、マイザーの方に寄つて來た。

「お前らにさよならを言いに来たんだ。昇格したら、会う時間も少なくなるだろ」と思つて。」

マイザーはテムジンの頭をポフンと叩いて言つた。そして、「そいやテム、ドルカスは？」と付け加えた。

テムジンは部屋の奥を指さす。

マイザーが行つてみると、ドルカスは大の字になつて寝ていた。
「わっ！」

マイザーがドルカスの顔の横を叩いて驚かすと、ドルカスはものすごい形相で跳ね起きた。

「なんだよ。びっくりこいた！」

彼、ドルカス・ジョーはマイザーの一一番の親友だった。

テムジンと同じ年だが、彼より遙かに頼もしく、でもバカで熱血な男だった。

「そういうや、マイザーって昇格したんだる。何でここにいるんだ？」

「だから、会う時間が少な・・・」

「ああわかった！！おめ～部屋間違えたんだろ！ダッセ～～～！」
いきなり笑われ、マイザーは少し頭に来た。

「お別れに、と思って遊びに来たんだろーがつーこのバカが！！」
二人のお決まりのやりとりを見て、テムジンとライデンは笑つてい
た。

「バカはそつちだろマイザー。別に格が違つても会えるじゃないか。」

ドルカスはライデンを指差した。ライデンも軽く笑う。

マイザーは納得し、でもどこか悲しげな顔をした。

「わかつたわかつた、今日は2人で食堂の特別激うまランチ食おうぜ。」

激うまランチに興味はなかつたが、マイザーは喜んで承知した。

「・・・いいよな。」

能天気なドルカスが、恨めしそうな顔でマイザーを見ている。

「そうしょげるなよ。別にドルが弱いって訳じやないんだから。マイザーが慰めるが、ドルカスはよけいに悲しい顔になつてテープルの上に伸びた。

「そういう意味じゃなくて、先輩に近づけるのが羨ましいって話だよ・・・」

マイザーはちょっと意外な気持ちだつた。ドルカスが上官方に思いを入れてるなんて思わなかつたから。

「まあ、お前まだ上正だからなあ。それがせめてもの救い。」

ドルカスは伸びたままふとくされた表情で吐き捨てる。

「ドルの憧れの上官つて誰? やつぱ、ライデンさんだろ?」

マイザーは定番の答えを問うた。というよりも、ライデン以外の上官を一人も知らなかつたせいでもある。

「ライデン先輩? ありきたりなのには興味ないぜ。オレが好きのはベルグドル先輩だよ。」

「ベルグドル？」

「ああ、ベルグドル先輩。つてまさかお前、知らねえのか？」

「もちろん」

ドルカスはマイザーの答えに驚き、スプーンを取り落とした。

「じゃあお前、機械戦争を生き抜いたのはライデン先輩だけと思つてるのか？」

「もちろん」

あ～、と、ドルカスがため息をついた。マイザーは焦る。

「いいか？ベルグドル先輩つてのはよ、機械戦争を行きぬいた偉大なの方だ。」

「そんな上官がいたのか。」

「いたんだよ。」

マイザーは驚きだ。あれだけライデンの噂は聞いたのに・・・。彼が“ベルグドル”に興味を持ったのは言つまでもない。

・・・いつしか、夜になつていた。

ドルカスと別れ、寮に戻つてきてから、小一時間ほど経つていた。彼はまだ、ベルグドルの余韻に浸つていた。

何か、騙された気分だった。

あれだけ、機械戦争を生きぬいたライデンに憧れ続けたのに、そんな上官がまだいたのなら、ぜひ会つて見てみたい。

マイザー・デルタの果てしなき歴史の回転は続く

ある朝、マイザーは目覚めた。
体中が鈍く痛む。

・・・昨日のMISSIONは大変だったなあ。

マイザーは昨日、スペシネフと一緒に行つMISSIONがあつた。要は、宇宙にある悪のアジト“ボアイト”から送り込まれたUFOを打ち落とせというもの。

思ったよりも困難で、マイザーは苦戦した。
しかし、スペシネフの機転をきかした攻撃と頭脳プレーにより、見事二人は勝利を納めた。

そのマイザーが今、寮のベッドに座り、ぼんやりと外を眺めている。
・・・

できるならこのままでずっといたかった。

しかし、寝起きは機嫌の悪いスペシネフがすぐそこにはいる・・・、それを考えただけで寒気がし、マイザーは部屋を出た。

行く当てなどなく、ただブラブラと基地の中を歩いていた。
人は誰も通らない。
マイザーは何日か前にドルカスと激うまランチを食べた食堂にたどり着いた。

そこで、ふと上官というキーワードが頭に浮かんだ。
しかし、何日か経ったためか、ライデン以外の上官のことはまた頭からぬけていた。
どうでもいいことだった。

食堂を離れ、あまり入らない基地の南館へやつてきた。
書庫などが並んでいるが、興味はない。

そのと、どこからかピアノの音が聞こえてきた。

マイザーは音のするほうへ走り、一つのドアに焦点を定めた。
耳を当てる・・・。

異常なまでに、激しく悲しい曲だった。

しかし、ものすく綺麗で美しく高度な曲に聞こえた。

「誰が弾いているんだろう。」

独り言を言つてドアを開けた。

知らない人だつた。

ライテンに勝るとも劣らないほど大きく、おおよそピアノには不釣
合いな体をした男がそこに座つていた。

髪はきれいな茶色で、その下にはグリーンの瞳が見えた。

「・・・。」

マイザーは言葉もなく、だんだんとピアノに近づいていく。

男は演奏を止めない。マイザーにすら気が付いていなによつだつた。

マイザーはさらに奥まで進んだ。

「・・・!—」

マイザーは驚いた。彼の左耳には大きな金属のパネルがはめ込まれ
ていたのだ。

・・・この人、目がないんだ。

哀れそうな目で見つめ、さらピアノに近づいた。すると、演奏

がぴたりとやんだ。

マイザーは反射的にピクッとした。

男は姿勢を変えず、目だけをマイザーへ向けた。

「何か用か・・・」

驚くほど冷たい声だつた。

「い・・・いえ、ピアノの音が聞こえたので、見に来たんです。」
マイザーが答えると、男は無言でまたピアノの方へ目を向いた。
演奏を始めようとしたらしいが、マイザーがそれを止めた。

「あ・・・あの、お名前を聞いてもいいでしょうか。」

返ってきたのは以外な答えだつた。

「そんなことを知つてどうする。」

男の視線は、睨んでいるかのようだつた。

「そんなん・・・オレは同じ「IRTUA」内の上官の名前を知つておきたいだけですよ!」

マイザーは少しムキになつた。

「・・・ぐだらない。」

男はそう言つと、再び悲しい旋律を奏ではじめた。

「上面シ!」

マイザーが男の肩をつかんだ。 男の視線が再びマイザーに向けられる。

無言のまま睨むその上官は、たとえようのない怖さだつた。

そのとき、マイザーは何かを思いついた。
そして、問うた。

「・・・ベルグドル・・・さん?」

男の目がまた向けられた。

「・・・知つていたのか。・・・もつとも嘘をつく必要はない、オレはベルグドル・ダンだ。」

そう呟かれた瞬間、マイザーの脳裏にドルカスとの会話が浮かんできた。

“ベルグドル先輩つてのはよ、機械戦争を生きぬいた偉大なお方だ。”

「あの！機械戦争を生きぬいたんですね！ 尊敬しますよーー！」マイザーが言うと、ベルグドルは鼻で笑った。

「やめた方がいい・・・。オレはギル上官のように立派に活躍したのではない。

ただ、友人を犠牲にして己のみが生き延び、それからの10年間憎しみだけをつなぎに生きてきただけだ。 オレは人間ですらない。憎しみでほりかたまつたただのマシーンだ・・・」

ベルグドルのセリフは悲しかつた。

バタン

暗い音と共に、ベルグドルは部屋から出ていった。マイザーはしゃがみこんだ姿のまま取り残された。しばらくは言葉も出なかつた。

「何やつてんだ、貴様」

ふいに声がして、目が覚めた。 寝のベッドの上だった。

スペシネフが顔をのぞきこんでいる。

「さうや、あのピタノの横で倒れていたようだ。

「貴様、具合でも悪いのか？ 勘違いするな、心配しているんじやねえぞ。」

スペシネフがそっぽを向いて言ひ台詞に、マイザーは少し安心した。

「なあ、スペ。」

「ああ？」

「自分のことをマシーンと思つなんて、恥しそうがあるみな。」

「・・・・・言つた事はよく分かるぜ。」

スペシネフはマイザーの額に手を当てた。

「人の心配は必要ないだろ？ 今は、自分の歴史を動かしてみやがれ。」

スペシネフはマイザーの皿じつに涙がたまるのを感じていた。
どうやら、感動したみたいだ。

「ありがとう、スペ・・・・」

マイザーがどんなショックを受けたのかは知らないが、俺の言葉で元気付けられたのならいいやといつのが、スペシネフの本音であった。

果てしなき生物の感情・・・

それは幸せだけ？ 慐悲だけ？ ・・・ それとも憎しみだけ？

それは、戦いと共に刻まれる宿命。

「VRTUA」とマイザーの果て無き心のループは、速度を速める・・・！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1328e/>

Universe operator

2010年10月19日16時02分発行